

だいず新品種「カリユタカ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	土屋, 武彦 白井, 和栄 湯本, 節三
巻/号	46巻12号
掲載ページ	p. 563-563
発行年月	1991年12月

だいず新品種「カリユタカ」

土屋武彦 白井和栄 湯本節三 田中義則 富田謙一

登録番号：だいず農林95号 系統名：十育214号 交配組合せ：ヒメユタカ/Clark Dt₂

特性の概要 カリユタカは、トヨムスメ並の中生種で、子実は白目中粒である。難裂莢性で最下着莢節位が高く、耐倒伏性も強であるので、コンバイン収穫に適する。紫花、円葉、白毛、有限伸育型で、主莖長、主莖節数および分枝数はトヨムスメ並である。

黒根病抵抗性は強であるが、ダイズシストセンチュウ、ダイズわい化病およびダイズ莖疫病に対する抵抗性はない。低温抵抗性は中で、低温年には臍および臍周辺の着色粒が発生する場合がある。子実収量は、トヨムスメよりやや劣るが、キタコマチを上回る。

子実の粗蛋白、粗脂肪含有率は中程度である。煮豆腐製品の評価はトヨムスメと同様良好であり、豆腐加工適性はキタムスメより優れ、トヨムスメ並である。

栽培上の注意 ダイズわい化病が発生すると、茎水分の減少が遅れ汚粒発生の原因となるので、防除を徹底する。また、ダイズシストセンチュウ抵抗性がないので、適正な輪作のもとで栽培する。

奨励品種採用地帯：北海道の十勝、道央、網走内陸地域。トヨムスメ、キタムスメ等の一部に置き換え、コンバイン収穫向き品種として普及奨励する。

命名の由来：機械刈り(コンバイン収穫)を意味する「カリ」に、豊作を連想させる「ユタカ」を重ねた。

育成後記 だいずの収穫調製作業(全作業の45%を占める)は、ビーンハーベスタで刈取り、にお積み乾燥し、ビーンスレッシャで脱殻調製するのが一般的である。しかし、刈取りは裂莢を防ぐため朝露の残る早

朝に行わねばならず、にお積みもつらい作業のため、作付け意欲を減退させる一要因ともなっている。

これまで収穫調製作業の省力化をめざして種々検討されてきたが、裂莢易の品種では収穫時期が著しく制約されるため、立毛乾燥が不十分で汚粒やしわ粒が発生する等問題が多い。そのため、コンバイン収穫に適する品種の開発が強く要望されていた。

コンバイン収穫のためには、①難裂莢性である、②最下着莢位置が高い、③耐倒伏性であることが必須である。十勝農試では、昭和50年から機械収穫向き品種の開発を進めてきた。わが国の白目中～大粒で良質の品種へ、外国品種(アメリカ、中国、東南アジア等)から難裂莢性因子を導入することを当面の目標とし、平成2年までに約180組合せの交配を行っている。しかし、難裂莢性の導入品種は小粒、晩熟、無限伸育型で耐倒伏性が劣る等難点があり、難裂莢性因子の導入は必ずしも容易でなかった。

また、難裂莢性の選抜法として熱風乾燥処理法(60℃、3時間)を開発し、選抜の効率化を図った。この方法により、熟期の異なる育種材料の難裂莢性選抜が容易になった。十勝農試では、初期世代はガラス室内乾燥法により難裂莢性個体を選抜し、中～後期世代は熱風乾燥処理法により検定及び選抜を実施している。

カリユタカは、良質の白目大粒品種ヒメユタカとアメリカから導入した難裂莢性のClark Dt₂を交配し、11年かけて選抜育成したもので、最初の機械収穫向き品種となった。本品種はコンバイン収穫適性が高く、省力化に有効であるので、十勝、上川の大規模畑作地

帯および道央の転換畑地帯を中心に作付けが見込まれ、道産だいずの生産振興に役立つものと期待される。なお、本品種に対する耐病性の付与、耐冷性の強化は今後の課題であり、さらに改良の努力を続けたい。

育成従事者：土屋武彦・佐々木 紘一・砂田喜興志・紙谷元一・伊藤 武・白井和栄・湯本節三・酒井真次・田中義則・富田謙一

(北海道立十勝農業試験場だいず育種指定試験地)

カリユタカの試験成績(十勝農試, 昭和62～平成2年)

品種名	成熟期 (月日)	主莖長 (cm)	倒伏 程度	最下着莢節位 (cm)	裂莢率 (%)	子実重 (kg/a)	百粒重 (g)	検査 等級	臍色
カリユタカ	10. 6	57	少	17.3	22	28.1	30.8	2下	黄
トヨムスメ	10. 4	52	微	14.4	83	29.8	36.0	2下	黄
キタコマチ	9.28	52	少	14.2	83	27.4	30.4	3中	黄
ワセコガネ	10. 3	86	中	11.8	16	29.4	20.9	2下	黄
キタムスメ	10. 6	74	少	19.5	88	32.0	31.8	2下	暗褐

注) 裂莢率は、熟莢の熱風乾燥処理(60℃、3時間)後の調査結果である。

T. TSUCHIYA, K. SHIRAI, S. YUMOTO, Y. TANAKA and K. TOMITA: A New Soybean Variety "KariyutaKa". 農業技術 46(12), 1991.